

チャンスは活かさないと

～大分県立病院で看護部から初の副院長誕生～



安東 和代 さん
大分県立病院副院長兼看護部長

大分県立病院の産婦人科を皮切りに、3年間の臨床を経験後、看護教員の養成学校で学び、大分県立厚生学院での教員生活、県環境保健部看護係などを経て、県病の現場に復帰されるという、看護に携わり続けた半生。現場を知り、後進の教育に携わり、事務にも明るい、オール・ラウンダーでいらっしやいます。

定年前の退職を決め、心の整理も済ませて、看護部長として最後の仕事に取り組んでいたところに訪れた「副院長」のポスト。看護部の悲願でもあった要職だけに、もしこれを固辞すれば、また何年か実現が遅れてしまうだろう……。 「定年まで、もう一年頑張ろう」と、今一度気持ちを上向きに切り替えるお気持ちの強さの源は、一体どこにあるのでしょうか。

先生になりたかった

本当は、学校の先生になりたかったんです。しかし、担任の先生から「お前は看護婦が合っている」と言われましたし、元々、人のお世話をするのが好きでしたから。厚生学院で12年間、学生に教えていたので、両方実現したとも言えますね。

家庭との両立

同級生を見ても、結婚して、子どもを産み育てて、なおかつみんな働いているんですね。当時は産前産後の各8週間しか休みがありませんでしたが、それでも働き続けられたのは家族の理解があり、飛んできてくれる母親の存在があったからです。共働きを良しとしない夫の実家に行く時だけは、専業主婦を装っていた時期もありました（笑）。

看護の質を上げる努力

認定看護師や専門看護師のように、専門分野を極める看護師を育てていく環境も整いつつあります。

患者さんの高齢化は看護内容の増加も意味します。歩くことから介助が必要ですからね。

また、在院日数の短縮によって、入退院の回転がとても早くなりました。一方で、「医療はサービス業だ」ということで、患者さんからの要求が増えています。

医療そのものも高度化していますし、限られた時間の中で、看護の質を上げていくことの難しさや常に向き合っていかなければなりません。

組織としてミスを防ぐ

「人間であれば間違える」ということを前提にして、組織としていかに防ぐかという立場で動いていかなければなりません。何段階もいろいろな目によってチェックすることが大切なんです。

喜びがストレスを消してくれる

ストレスはありますよ。お産以外で寝ていたことはありませんけれど（笑）。

患者さんから感謝のお手紙を頂くと嬉しいですね。最近、そういったお手紙を頂く機会がとても多くなりました。また、若いスタッフが活き活きと働いている姿を見ているのも嬉しいですね。

夜勤の時、外が明るくなってくるとほっとするんです。前日、大きな手術をした患者さんのところに朝方行って、ベッドを起こしながら「ほら、綺麗でしょう」と早朝の由布・鶴見と一緒に眺めたのも良い思い出です。

看護の基本とは

患者さんは「言いたいなあ」と思っていることをなかなか言えないじゃないですか。それがわからなきゃ、看護じゃない。そこがわかってくると、本当の患者さんの思いに近づけるんですね。

チャンスを活かす

看護・医療用語ならわかりますが、事務用語が飛び交うので、県庁に居た時には、とても苦労しましたよ。しかし「これが男の人の仕事の仕方なのか」と感心することも多く、とても勉強になりました。

いつだったか、ある方に言われたんです、「チャンスを活かして行きなさい」と。チャンスが与えられたのは、自分に必要だったからだと思って、いつでも前向きでやってきました。

大分県立病院初の副院長兼看護部長

副院長に看護部から入ることによって、病院全体の意思疎通がさらに良くなると思うんです。

患者さんにとって必要な医療、看護のためには、とても大事なことだと思います。

まずは、3月いっぱい、副院長兼看護部長の仕事をがんばります。それから後は、もし私が持っているものを必要とされれば、なにかしているかもしれないですね（笑）。